

そ

れにしても、子どもでさえ夢を見ることが難しい世の中になりました。「いい大学に行かないと、この不況では就職先が見つからない」「親への経済的な負担を考えると、絶対国立に受からない」と。先日大学入試センター試験会場でマイクを向けられた受験生たちの言葉は、不況の影を受けて、切羽詰まっていました。

現在、100年に1度とまで言われる金融危機が世界を、そして日本を襲っています。派遣切りのニュースが連日伝えられる中、心ある地方自治体や企業の中から、契約解除に遭った方々に優先して再就職先や住居を提供する動きが出ていることを心強く思います。日比谷の年越し派遣村に辿り着いた男性は、「温かい支援が胸にしみる。いつか、ボランティアなどをして、恩返しをしたい」と語っていました。どん底を見て、人から支えられることのありがたさを知り、他者を支えたいと思う――このコメントに、私たち日本UNHCR協会に寄せられた支援者からのメッセージを思い出しました。

「私たちは戦後の日本で、現在の方々には想像もつかない生活の中で、食料、衣類など、海外の方々の援助にどれほど助けられたことか」「生命の危険と隣り合わせに援助活動を行う方々のことを忘れずに過ごしたいと思います」「パブルの崩壊で多額の資産を失いました。しかし、周りの人々の支援でどん底を

乗り切りました。わずかながらお送りします」

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の職員にとって、また、彼らの活動を支える日本UNHCR協会でも働く私たちにとって、こうした支援者の皆様からの励ましの言葉ほどありがたいものはありません。派遣切りやガザ地区攻撃など重くのしかかるニュースが多いだけに、思いやりが心にしみま

す。皆様からのお便りを読むと、もっと頑張ろう、一人でも多くの難民を支援しようという気持ちになり、元気の素をたくさんいただいています。時々机から取り出して読ませていただき、自分を励ましています！

ちなみに、UNHCRが故郷を追われた難民・避難民3170万人への援助活動に必要な活動資金は、2008年でおおよそ1800億円。これは、定額給付金の予算2兆円の10分の1以下です。

国連機関の多くは分担金制度を採っていて、予算が決まれば、加盟国は分担率に応じて支払いの義務が生じます。しかしUNHCRの場合、その活動資金は、ほとんどが各国政府の任意の拠出金と民間の皆様からのご寄付によって支えられています。そもそも安定した財政基盤を保つのはとても厳しかったところに、この世界恐慌です。支援国の経済状況の悪化で拠出金や寄付が減りかねず、影響を心配しています。

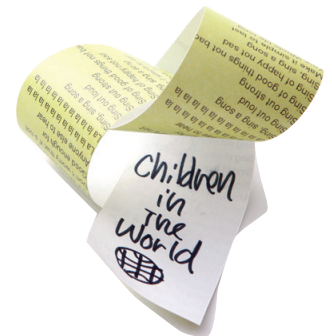
volume 6

世界の子どもたち

大変な時代だからこそ、 人と人の助け合い、 心のつながりが 子どもたちの未来を照らす

世界中を襲った同時不況の波。その影響は、支援や寄付に支えられている難民たちの暮らしにも大きく及んでいる。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の公式支援窓口、日本UNHCR協会の根本かおるさんは、そんな難民たちを想い、守る「きずな」を今こそ強く意識してほしいと願う。

文…根本かおる

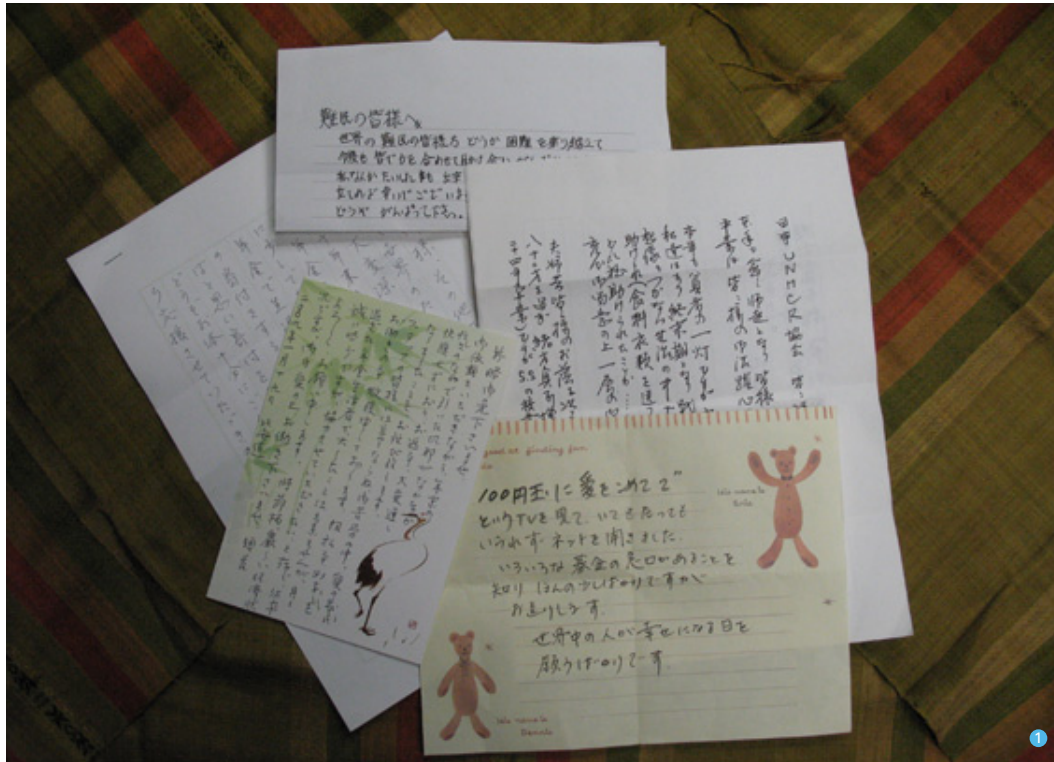


支援国からの拠出金や皆様からお寄せいただくご寄付は、UNHCRにとって、人間にたとえてみると、まさに生命を維持する「血液」です。この「血液」が行き渡らないと、一体どのようなことになってしまうのでしょうか。

私は、かつてネパールでブータン難民への援助活動にあたる中、大変な資金難で、難民の家族に配るわずかながら

の支援物資を削らざるを得ませんでした。配布する野菜の量が減り、石鹸が配給物資から消えました。

子どもたちが通う難民キャンプの小学校は、屋根の修復資材を提供できなかったために雨漏りがひどく、雨期には休校せざるを得ませんでした。学校は休校せざるを得ませんでした。学校の雨漏りでした。雨期には休校せざるを得ませんでした。学校の雨漏りを見たとき、迫害で国を追われ



た人々が、その避難先でも、生きるために必要なわずかな食料や医薬品、教育の機会を十分に手にすることができないことを、本当にふがいなく、そして申し訳なく思いました。

今の経済危機で最も壊滅的な打撃を受けるのは、脆弱な開発途上国に暮らす、弱い立場に置かれた人々です。昨

年横浜で開催されたアフリカ開発会議（TICAD）では、アフリカの高い経済成長が注目を集めました。しかし、この経済成長のけん引役だった、鉱物資源などの一次産品価格の高騰は値下がりになり、経済は急速に冷え込んでいます。世界銀行の発表では、昨今の食料・燃料危機により1億人がすでに



貧困と飢餓状態に後戻りさせられたと言われ、この大不況はさらに追い討ちをかけるでしょう。

アフリカなどの新興国での経済の悪化は、物価の高騰、失業の高まり、社会の不安定化をもたらし、周辺部に追いやられた人々を直撃しかねません。この結果、やむを得ず故郷をあとにす

① 支援者の皆様からのお便り
 ©日本UNHCR協会 ② 食料配給をうけるジブチのソマリア・エチオピア難民。©UNHCR ③ ネパールのブータン難民の子どもたち。教室には机も椅子もない。
 ©UNHCR ④ 子どもの栄養不良は将来に禍根を残すことに。©UNHCR



根本かおる

ねもと・かおる ● 東京大学法学部卒。テレビ局入社後にフルブライト奨学生としてコロンビア大学大学院へ留学。修士号取得後、1996年からUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）勤務。トルコ、ブルンジ、コンゴ、ジュネーブ本部、ネパール事務所などを経て、2007年6月より、UNHCRの公式支援窓口、日本UNHCR協会事務局長。

る難民・避難民があらたに生まれる恐れがあります。しかし資金が集まらなければ、故郷を追われ、生活の糧を持たず、援助に頼らざるを得ない難民・避難民に対して、UNHCRは十分に援助活動を行うこともできません。

避難生活を強いられている人々が、さらに生活を喪失することがないように、この大変な時代にあつて、なお、UNHCRのロゴマークの「人を守る人の手」が象徴するきずなが、日本で拡がっていくことを願っています。